



たからさがし



にし はる

ある日の朝、ハート王国のおしろは大きすぎ。

「たいへんだ！王様のかんむりつつえが、なくなった！」

けらいたちが、おしろの中をどんなにさがしても、見つかりません。

そのとき、

「あっ！これは！」

ひとりのけらいが、1まいの紙を見つけました。

「だいじなおたからは、ハート王国のどこかにうめたよ。

さがしてみたらー？

いたずらキッドより」

と、書いてありました。

いたずらが大きすぎ、いたずらキッドのしわざだったのです。

王様は言いました。

「3日後に、ダイヤ王国のパーティーに行くから、どうしてもかんむりつつえがいるのじゃ。」

すると、けらいが言いました。

「王国は広いので、とても、われわれだけでは見つけれません。

国民にも力をかりましょう。

見つけた者には、ほしいものを何でもあたえるやくそくをすれば、きっと3日で見つかるでしょう。」

王様は、手をポンとたたいて言いました。

「それはよいアイデアじゃ。」

けらいたちが、このことをいそいで王国じゅうにふれてまわると、さっそくたくさんの国民がおしろにあつまりました。

その中に、国いちばんのはたらき者のシンと、国いちばんのなまけ者のナックがいました。

シンは王様に言いました。

「王様のために、いっしょうけんめいさがします。」

ナックも王様に言いました。

「ほしいものが何でももらえるんだって？オイラが見つかるよ。」

シンは、家に帰ってかんがえました。

「“ハート王国のどこか”ってどこだろう。

あの山の上かもしれないし、海のすなはまかもしれない。

うーん…。

よし！じゃあ、ここからさがそう！」

シンは、シャベルをもちだして、げんかんの前から、家のまわりをほりはじめました。

ナックも、家に帰ってかんがえました。

「“ハート王国のどこか”って、どこだろう。

あの野はらかなもしれないし、その川べかもしれない。

うーん、めんどくさい…。

よし！あの手しかないな！」

ナックは、大きなあなほりのきかいをもちだして、あたりかまわず、ガシャンガシャンとほりはじめました。

1日目の太陽がしずみかけてきました。

「よいしょ。よいしょ。」

シンは、シャベルで家のまわりを10周ほりましたが、何も見つかりません。

そこに、リスのスーがやってきました。

「やあ、シン。がんばっているね。

おや、土がとてもよくたがやされているね。

ここに木の実をうえてもいいかい。

おいしい実のなる木がはえてくると思うよ。」

「やあ、スー。

木の実をうえるんだね。

もちろん、いいよ！」

ナックは、あちらこちらに大きなあなをあげながら、王様のかんむりつつえをさがしました。

「あー、めんどくさい。」

すると、カラスのカータがやってきて言いました。

「こんな大きなきかいなら、ぜったいに、ナックが見つけたとおもうよ。

ぼくも手つだうから、王様のごほうび、少しわけてよ。」

「やあ、カータ。

もちろん。オイラは大金もちになるから、少しくらいわけてもいいよ。」

「ありがとう、ナック。

ぼくは、このあたりだとおもうよ。」

ナックは、カータがおしえてくれたところを、ガシャンガシャンと、きかいでほっていきました。

太陽がしずみ、あたりはくらくなってきました。

そのとき、

「ガシャン...カツン！」

なんと、ナックがつえを見つけたのです。

「やったー！これで、大金もちだ！」

ナックは、いそいでおしろへ行きました。

「王様、つえを見つけたよ。」

「おお、ナック、早かったのう！」

さあ、なんでもほしいものを言っておくれ。」

「じゃあ、100万ハートコイン、おくれよ。」

王様は、うなずいて言いました。

「わかった。ナック。ほんとうにありがとう。」

ナックは100万ハートコインをうけとりました。

「へへ。これでなまけてあそんでくらせるな。」

そこへ、カータがついてきて言いました。

「やくそくだよ。ぼくにもわけておくれよ。」

「ああ、そうだったね。じゃあ、ほれ。」

ナックはカータに1ハートコインあげました。

「え！これだけ？」

カータはプンプンおこって、どこかへとんで行ってしまいました。

2日目。

シンは、きのうのつづきから、シャベルでザクザクとほりました。

「よいしょ。よいしょ。」

家のまわりを20周ほったとき、キンピカのふくを着たナックがやってきました。

「やあ、シン。

オイラはきかいをつかって、王様のつえを見つけたよ。

100万ハートコインもらって、りっぱな家をたてて、おいしいものをたくさん食べているよ。

それにしても、そんなさがしかたじゃ、1年たってもかんむりは見つからないよ。ハハハ」

「そうか、つえは見つかったんだね。

よかった、よかった。

ぼくも、がんばって、あしたまでにかんむりを見つけなきゃ。」

そこに、ミツバチのブーンがやってきました。

「やあ、シン。がんばっているね。

おや、こんないい土はじめて見たよ。

ここに、花のたねをうえてもいいかい。

おいしいみつがとれそうだよ。」

「やあ、ブーン。

花のたねをうえるんだね。

もちろん、いいよ！」

2日目の太陽がしずみました。

かんむりは、まだ見つかりません。

夜、シンはかんがえました。

「かんむりは、どこにあるんだろう。

ナックが言っていたように、明日じゅうに見つけれないかもしれない。

うーん...

でも、もうひとほりしたら、見つかるかもしれない。

よし。明日も、王様のためにがんばろう。」

とうとう3日目。

家を出ると、スーのうえた木が大きくなり、ブーンのうえた花がさいていました。

シンは、スーとブーンといっしょに、とてもよろこびました。

そして、きのうのつづきから、シャベルでザクザクとほりはじめました。

「よいしょ。よいしょ。」

うわさを聞いたちょうちょや小鳥、うさぎやきつね、くまやたぬきなど、たくさんのどうぶつたちも、シンのほったあとに、つぎつぎといろいろなたねをうえていきました。

3日目の太陽がしずみはじめました。

かんむりはまだ見つかりません。

シンは、「もうひとほり。もうひとほり。」と、いっしょうけんめいほっていきました。

そのまわりで、いろいろなたねをうえたどうぶつたちが、

「がんばれ がんばれ フレー フレー」

とおうえんしました。

夕日はもう、見えなくなりそうです。

そのとき、

「ザク...カツン！」

音がしたところを、シンがいそいで手でほってみると、なんと、ちょうど30周目に、王様のかんむりがあったのです。

みんな大よろこび。いそいでおしろへ、かんむりをとどけに行きました。

王様は言いました。

「シン、ほんとうにありがとう。

さあ、なんでも、ほしいものを言ってごらん。」

シンは言いました。

「王様、ぼくは、ほしいものなんてないんです。

すてきな友だちがたくさんできたし、家のまわりに、すばらしい畑や森ができました。

この3日間で、さいこうのたからものもらいました。

ぼくは、このなかまたちと、畑や森でとれたものをつかって、レストランをひらきたいと思えます。

王様も、ぜひ、食べにきてください。」

王様はうれしそうに言いました。

「ホッホッホッ。そうかそうか。

しかし、何もあげないというわけにはいかん。

ナックと同じ100万ハートコインをあげるから、それでりっぱなレストランを作っておくれ。」

「王様、ありがとうございます。」

シンは、ふかぶかと頭を下げて、100万ハートコインをうけとりました。

こうして、王様は、ダイヤ王国へぶじにしゅっぱつすることができたのでした。

シンは、王様にいただいた100万ハートコインで、すてきなレストランを作りました。

レストランのオープンの日、うわさをききつけたおきゃくさんがたくさんつめかけて、お店はてんてこまいです。

すると、料理をいっしょうけんめい作っているシンのかたを、ツンツンとつつく人がいました。

「ぼくのおかげだよ。」

その声にシンがふりむくと、そこにはなんと、王様のかんむりつつえをかくした、いたずらキッドがいるではありませんか。

シンはあきれて言いました。

「たしかに、たくさんの友だちができて、すてきなレストランができたのは、かんむりをさがしたおかげだけど、わざと人をこまらせるのは、よくないことだよ。」

そして、いたずらキッドのテーブルに、おさらをおきました。

「はい。ごちゅうものトマトソーススパゲティだよ。」

いたずらキッドはプーとふくれて、そのスパゲティをひとくち食べました。

が、つぎのしゅんかん、ほっぺたに手をあてて言いました。

「わあ、おいしい！

こんなおいしいスパゲティ、はじめて食べたよ。」

そして、いたずらキッドは、少し何かかんがえて言いました。

「シン、ぼくも、人をよろこばせることがしたいから、ここではたらかせておくれよ。」

シンはよろこんで言いました。

「もちろんだよ！

人がたりなくてこまっていたんだ。

よろしくたのむね！」

そのころナックは、100万ハートコインをつかいはたし、家でひとりさみしくなまけてすごしていました。

するとある日、ドアをトントンとノックする音がしました。

ナックは

「だれだろう、オイラにはおきゃくさんなんて、だれもこないはずだけど。」

と思いながらドアをあけました。

すると、そこに立っていたのは、王様でした。

「王様！」

「ナックよ、ひとりさみしくすごしているようじゃの。

どうじゃ、わしといっしょに、シンのレストランに行かぬか？」

ナックは、だれかといっしょにごはんが食べられるのがうれしくて、王様についていきました

。

レストランにつくと、王様は大すきなグラタン、ナックはピザをちゅうもんしました。

やがて、料理をはこんできたのは、あのいたずらキッドでした。

いたずらキッドは言いました。

「王様、いたずらをして、こまらせてしまっでごめんなさい。

もう、いたずらはしません。」

いたずらキッドがあやまると、王様は言いました。

「ホッホッホッ。そうかそうか。いいんじゃよ。

これからは、みんなをたのしくするいたずらをたのむよ。」

それを聞いたいたずらキッドは目をかがやかせて言いました。

「そうか！それなら、ぼくにもできるよ！」

王様はそれを見て、うれしそうにグラタンをひとくち食べました。

「なんと！

こんなおいしいグラタンは、今まで食べたことないぞ！」

ナックも、ピザをひとくち食べました。

「本当だ！こんなおいしいピザ、今まで食べたことないや！」

そしてナックは、料理をおいしそうに食べているおきゃくさんや、たのしそうにはたらいっているみんなを見て、言いました。

「シンのやつ、家のまわりをあんなにほって、なんてムダなことをしているんだろうって思ったけど、ひとほり、ひとほり、ムダじゃなかったんだなあ。」

それを聞いて、王様も言いました。

「ほんとうにそうじゃのう。

しかし、つえを1日で見つけたナックも、たいしたものじゃったぞ。

なまけものには、なまけもののよいところがあるのじゃよ。」

するとナックは言いました。

「えへへ、そうかなあ。

あ、そういえば、あれはカラスのカータのおかげでもあったんだ。

それなのに、オイラ、1ハートコインしかあげなくて、わるいことしたな。」

王様は言いました。

「そうじゃったのか。

それは、カータとなかなかおりしたほうがいいのう。」

ナックはうなずいて、言いました。

「うん、そうだね。

じゃあ、オイラ、ここでカータといっしょにごはんを食べることにするよ。」

王様はうれしそうに言いました。

「ホッホッホッ。それはいいのう！」

こうして、シンのレストランには、ひっきりなしにおきゃくさんがおとずれ、国いちばんの人気のお店になりました。